

寄稿

「松江の地名の由来は何ですか？」

佐和田 丸（10期）



私は以前から、「松江」の地名が中国伝来の地名だと喧伝されていることに、釈然としな
いものを感じ、真相はどうかとあちこち調べたりしていた。古くからある有力な説は観光誌
などによれば、大体、次の三説である。

（一）『懐橋談』『雲陽誌』という江戸期の地誌によるもので、松江城を築いた堀尾吉晴が
松江の風景が湖面に美しく映え、鱸(すずき)や蓴菜(じゅんさい)を産するところが中国浙
江省の淞江府(ずんこうふ)に似ているとして命名したという説。

（二）新井白石の著『紳書』によると、堀尾氏の家臣で松江城の縄張工事にあつた小瀬
甫庵(おぜほあん)が「鱸の名所也」として命名したという説。

（三）『雲陽大数録』では圓成寺(堀尾氏三代の廟所)開山春龍和尚の命名とし、「唐土ノ
松江、鱸魚ト蓴菜ト有ルカ故名産トス、今城府モ其スノコウニ似タレバ、松江ト称ス
云々」と記されているという説。

そして、昭和53年(1978)には、島根大学の入谷仙介教授も地元新聞に、命名に苦心し
ていた堀尾吉晴が、渡明の経験のある春龍和尚の進言もあつて「松江」を採用したのでは
ないかという推論を発表されたりしていた。

私に関心を持ち始めたその頃、平成10年(1998)、和歌山であの毒物カレー事件があ
り、現場の近くに「松江地区」があると知り、角川地名辞典で調べてみたら、昔は松林に
囲まれた美しい入江で、名前もそれに由来し、今は埋め立てられ広大な日本製鉄和歌山製
鉄所となっている、とあつた。

私はその時、和歌山でそうなら、古代からの人間の営みの盛んなわが「松江地帯」にも、
昔から「松林に囲まれた入江」があつて、「松江」と呼ばれていたと考えるのが、中国伝来
の地名よりはるかに自然ではないかなと感じたが、そのまま今日まで来てしまった。

最近になって漸く郷土史家の先達である藤岡大拙氏が、『松江』の地名は開府以前からあ
つたという論考を「松江開府400年 松江藩の時代」(平成20年山陰中央新報社)の冒頭に
掲載されていることを知った。既にその前の平成13年3月には「湖都松江」創刊号の特別
稿に「椿説 松江地名考」として掲載されていたことも。

それによれば、「天文3年(1534)、越前福井の人、大森正秀が出雲大社参拝の旅を「出
雲紀行」として著わしている中で、“出雲の松江の府に至ったら、その錦浦は磯馴松
(そなれまつ) 生い連なる美しい風景であつた”と記している」とのこと。

藤岡氏は、「松江の府」はおそらく意宇川の河口あたり、「錦浦」は出雲郷の南岸あたり
ではないかと推論され、その70年後の松江開府時に、堀尾吉晴はその狭い地帯の地名の

「松江」を、末次、白潟二郷を含む広い地帯の地名に拡大して採用し、それが中世から近世の松江への転換点となったと論考しておられる。

私には、藤岡氏の、少なくとも松江開府の70年前には（もっと前からかもしれない）、「松江」という地名が狭い地域であったにせよ存在していたという史実に即したこの論考は、和歌山の松江を知って以来、疑問に思っていたことが氷解して、おおいに納得するものだった。

考えてみれば、当時は中国の地名を拝借したとする方が確かに重みがあったのかもしれないが、私はこの藤岡氏の説も（四）番目に加えて観光誌などでも紹介し、これからの研究、歴史の評価を待てばいいと思う。

出雲人である私は、この（四）が一番腑に落ちるが皆様はいかがであろうか。

以上



意宇川河口付近にあった錦浦の様子
（「松江藩の時代」から）

「松江開府400年 松江藩の時代」
（平成20年山陰中央新報社）